

隨

筆

鷗外と芥川

井 口 鐵 介

森鷗外は史伝『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』を書き終えて、次の『北条霞亭』執筆の準備をしながら「細木香以」を書き上げた。細木は幕末の大通だいつうと言わされた人で、大勢の取り巻きを引き連れ吉原に遊び、歌舞伎役者を聴観ひきまんにし、時に俳諧や狂歌に興じて豪遊した。

大正六年十月に「細木香以」の新聞連載が終わる頃、ある知人が芥川龍之介は細木の子孫であることを鷗外に知らせてきた。鷗外は細木に関する親戚関係の記述に誤りがあれば芥川に訂正してもらいたいと思ふ問い合わせた。「幸に芥川氏はわたくしに書を寄せ、又わたくしを來訪してくれた」と述べている。

鷗外に宛てた芥川の書簡は散逸し、「芥川龍之介全集」の書簡集にも見当らないが、芥川が鷗外を訪問した時の様子は、「文芸的な、余りに文芸的な」の中の「森先生」によつて多少窺い知ることが出来る。「僕はいつか森先生の書齋に和服を着た先生と話し

てゐた」とあり、書齋の隅には薄縁が一枚敷かれ、その上に北条霞亭の手紙が何十本か並べてあつたとあるから、この時の訪問が細木の親戚関係の質疑と応答のためであつたと思われる。芥川が細木の子孫であることが世間に知られたのは大正五年四月の雑誌『新思潮』に発表した「孤独地獄」のためである。「この話を自分は母から聞いた。母はそれを自分の大叔父から聞いたと云つていて」「大叔父は所謂大通の一人で、幕末の芸人や文人の間に知己の数が多くつた」「姓は細木、名は藤次郎、俳名は香以、俗称は山城河岸の津藤と云つた男である」と芥川は書いている。その津藤がある時、吉原の玉屋で禪超という僧侶の客と知り合いになつた。遊郭の二階で欄干にもたれ月を眺めていた禪超を取り巻きの者と間違えて、津藤が後ろから耳を引つ張つたことが機縁であった。玉屋で花魁おいらんを相手に三味線を弾いていた禪超が次第に元気を失くし、こんな事を津藤に話してその後姿を消した。「地獄にもさまざまあり、根本地獄や近辺地獄は地下深くにある。しかし、孤独地獄は地上にあつて、目前の境遇が、すぐそのまま地獄になる」と言うのだ。

血の池地獄や針の山地獄も恐ろしいが孤独地獄となれば切実に誰の身にも迫つて来る。螺寡孤独は昔も今もあり、連れ合いに先立たれ一人暮らしをしている人も多いだろう。孤独という得体の知れない荷物を背負つて生きている人たちが大勢いるに違いない。人間に生まれたからには、誰もが孤独と背中合わせに生きていくのだという覚悟が必要なのかも知れないが、孤独地獄には陥らないようにしたいものだ。

芥川は生まれて間もなく、生母新原フクが精神に異常をきたし、父の実兄芥川道章とその妻トモに預けられ、やや長じてその養子となつた。龍之介は親にわがままを言わない子であつたという。義母トモの叔父、龍之介の大叔父が細木香以であつた。

酒田にて

市川光治
(文芸光風)

長雨の肘折渓谷を出て、酒田の駅に降り立つた時も、バス停で雪国生活八十年という背筋の伸びた元

気のよいはさまに話を聞くまで、不覚にも私は、なぜこうも雨が多いのかという疑問から抜け出ることはできなかつた。なるほどはさまのいうとおり、裏日本が豪雪地帯であるゆえんは、秋の終わり頃から長雨と強風が続き、それはそもそも日本海上の低気圧から吹き込む風の流れが、列島の中央の山脈に当たつて雨や雪を降らすからにはかならないのである。ばさまによれば、子供のころは雨合羽にちゃんと長靴で学校に通わなければならず、なんとなれば、傘などをさしていても、風にあおられて役に立たないからで、この辺の人らは皆、年中空を見上げて、雲が切れそうなときには買物に行くのだそうだ。

そのばさまに聞きたいところをたずねると、「駅の案内なんかで聞いてもだめだ、あの人らは実情を知らないから。ええ確かに循環バスはあるだが、山居町を通るとはかぎらない。運転手に確認したほうがいいだ。わしらは、子供らも独立したで、ひとりぐらしだから、車ももつてないさ。だからどこへでもバスでいくだがね」と教えてくれた。ついでに、鳥海山はどっちの方向でしよう、と重ねてたずねると、駅舎の横を指差し「あそこだ、今日は裾だけし

か見えねえ」という。重く垂れ込んだ雲の下に本当に裾野が見えるにしても、ほんやりとぼやけて、かすみに溶け込んでいるようだ。

すぐやつてきた市内循環バスの運転手に聞いてみると、手を横に振って、行かない、という。教えられたように、鶴岡行きのバスに乗ると、それは酒田の町を大きく一巡してから、山居町に着いたのだが、その通つた道筋に本間家本邸や鎧屋や相馬楼はあつたのである。

山居倉庫近くのホテルに荷物を置いてから、私は倉庫から本間家へ向かい相馬楼まで歩いた。つまりバスのコースを逆に歩いたわけだ。

相馬楼の前の道の奥に赤い鳥居があり、そちらも見ようと歩いていくと、町屋の壁になにやら張り紙がある。見ると、今まさに目の前にある風景を撮った写真があり、おくりびと撮影場所である。NKエージェントの建物の地図も張つてある。おくりびとにでてくる、納棺師の社屋である。

急な坂道を登つていくと、左手に映画でみた三階建ての洋館が見えてきた。観光客風の若いカップルが、NKエージェントの表札の掛かった玄関の前で、

笑いあつている。

後ろを振り返ると坂の下には、すでに日の暮れかかつた人影のない寒々しい町並みが茫漠と広がつていた。

お客様さん、その行き先は、ありません

いつでもハッピー

私が、バスに乗ろうとしたら、列が出来ていきました。品のいい、おじいさんが、何か、たずねています。傍らに、おばあさんも一緒です。私は、時刻を見るふりをして、しばらく、やりとりを聞いていました。「○○駅行きは、無いかな?」運転手さんは、困っています。私は、あれ?と思いました。優しい運転手さんは、なかなか言い出せません。切なくなりました。これが現実?

中部地方の実家のこのあたりも、高齢化が進みました。でも、お客様さんは、何も言わずに、見守っています。ついに、見かねて、一人の男性が、おじいさんの肩に手をあて、「あの」と、何かゆつくり

話し始めました。

私は、胸がしめつけられそうで、その場を離れ、実家の母が、元気なことに感謝をして買い物に向かいました。

必要な物だけを、手短かに見つけて、レジを済ませたあと、ふとお茶でも飲もうと思いました。ステバに入ろうかな？それとも？小さなショッピングモールです。お店の窓越しに、先程の、おじいさんとおばあさんが、映りました。

もう一度、帰りのバスの時刻を私は確認つつ、先程のことが気になつて、引き戻ると、テラス席に、おじいさんと、おばあさんが、仲よく腰かけています。木でできた、古い長イスでした。

私は少し近づき、

「寒くなつてきましたね。どうか、お大事になさつて下さいね！」と、声をかけました。

おばあさんは、

「おじいさん、お大事にして下さいね、と、言わされましたよ。」

とっても自然で、にこやかに、穏やかに、おじいさんも、遠くを見ながら、

「うん、うん、うん。」とうなずいて。

「そうか！これは、一人にとつての、いつものお散歩コースなのだ、と。私達の世代より、ゆつたりとした時間が流れている、デートなのだ!!と、思いました。

おじいさんは、まだ杖をついて歩いていたので、私はそう強く感じたかもしません。

その日は御天氣も良く、秋晴れでした。
「たくさん二人で歩いて、たくさんいろんな景色を見て下さい。」と、心の中で祈りました。

白髪の素敵なお夫婦、今でも暖かく、心に残つています。

「愛に勝るものは、なし。」

「ラブラブなんだなあ。」と、思い、私も、幸せな気持ちになりました。

出会いの縁

梅澤輝也

十月に入つて間もなくだつた「セラフの食欲が一段と落ちてしまつて…」と電話、話す声が次第に涙声になつて来る。セラフは、ラブラドール・レトリバー、現在十五歳の雄、昨年現役を引退した盲導犬である。この犬種の平均寿命は十三歳前後、推定すると、セラフは私と同じ位の年齢か、ちょっと上の後期高齢犬である。七月月中旬頃から、体調を崩し、獣医からは『もう、あまり長くはない』と言われている。電話をしてきたのは、飼い主のレナさん、笑顔の素敵な、明るく若い女性である。

私が初めて会ったのは、彼女の言葉によると『映画の様な出会い』だつた。二〇一六年五月、私は新宿駅で湘南新宿ラインの下り電車を待っていた。すると駕員の先導で女性と盲導犬が、ひと言二言、言葉を交わしながら優先乗車した。続いて乗り込んでみると彼女の横の席が空いていた。盲導犬の眼が「ど

うぞ」と、私を見上げた様に感じた。誘われた様にそこに座ると、初めて身近に接する足元の盲導犬に興味が湧いて、彼女に話しかけてみた。すると、明るい声で「セラフという名の、大切な私のパートナーです」と教えて呉れた。それをきっかけに話が弾み、私は隣りに座っている彼女が、目の不自由な方といふことも忘れていた。私は嘗て飼っていた、自慢の「ペッピングル」の話までしていた。あつとう間に川崎の手前で、彼女たちは慌ただしく降りていつた。

数日後、メールが来た『湘南新宿ラインで楽しい時間でした。一日がとても満たされた気持ちになりました。コンサートに誘つて戴き嬉しかつた』と。

私達のウクレレ教室は二〇一〇年以来、毎年八つの教室が一堂に会し、それぞれ五～六曲ずつ演奏して会食、交流を深めている。二〇一六年にはレナさんとお母さん、そしてセラフが、クリスタルホテルのパーティに参加され、これ迄には無かつた新しい雰囲気で盛り上がつた。それからは、私達には馴染の仲間となつてゐる。二〇一八年には、レナさんがソプラノ・サックス、新婚のご主人がギターで、ス

トレンジヤー・イン・ザ・ナイトを演奏して、大きな喝采を浴びた。また、恒例の参加者全員の集合写真ではセラフは、いつも顔を上げて、カメラ目線でポーズをとる。

レナさん曰く『この様な縁を繋いてくれたのは、ビーグルちゃんとセラフでした』そして『毎年セラフと一緒に参加しているパーティは、ずっと前から参加していたみたいに思え、私の秋には欠かせないものになっています』と。

私は、セラフに仲間意識の様なもののすら覚えるようになっている。いま懸命に生きている日々のセラフ、その姿は他人事（ひとごと）とは思えない。

長寿のスタートラインに立つて

笠原正義

私は、今年で70歳になり「古希」を迎えました。私が子供時代、古希の人と言うと「ずいぶん年寄りだなあ」という感じがしていたのですが、自分が古希になつてみると「意外と古希もまだ若いな。さす

が人生100歳時代だ」というふうに思っています。さて、人間、一日一日自分がどう変わったかは分からぬもので、殆ど変わりなく変化して行き、全く変化がないように見られます。しかし、之が5年、10年という時間軸で見ると、そこには大きな変化があるのです。60歳の節目の「還暦」は、特に意識はしませんでした。60歳は、昔のような「おじいさん」ではないからです。しかし、70歳・古希は非常に強く意識しました。この思いを強くしたのが、市から届いた国民健康保険高齢受給者証です。もう立派な高齢者、お爺さんと、行政が云つているのです。

ところで、古希を迎えて、ふと自分の余命は、あと何年かと思い調べてみました。厚労省は、国勢調査の結果を基にして5年に一度「完全生命表」という表を更新します。この表は年齢ごとの「平均余命」を計算した結果です。もちろん、自分自身の余命が分かるわけではありませんが、自分が、あと何年生きる可能性が高いかということが分かります。厚労省「2019年（令和元年）簡易生命表」による平均寿命は、男性81・41歳、女性87・45歳。

前年より伸びました。また、70歳の男女の平均余命は、男性なら16年ちょっと欠ける、女性なら20年にちょっとくらいの余命があることが分かります。

平均寿命が伸び、古希（70歳）は「長寿」と呼ぶには微妙な年齢です。元気さと衰えとが、入り混じった境目のような年齢であり、例えれば、「長寿のスタートラインの年」とでも言えはいいのかかもしれません。

長寿の時代に生きる運命のため、「古希」の齢を数えることができたのは幸せでした。これから的人生は「残された人生」と考え、「スタート」することとします。

最後に、「古希」を迎えて、お母さんと家族へ一言いわせてください。結婚して、38年。古希までの半分と一緒に過ごしたお母さん。いつも迷惑かけてばかりでごめんなさい。これからも一緒に旅行に行つて美味しいもの食べて楽しもう。一緒に楽しい時間をたくさん、たっくさん！過ごすことにして。優しくて頼りになるお母さんは私の自慢です。そして家族のためにありがとう。

今年から、また新たな人生のスタートです。次は、

80歳で傘寿、そして、孫が、いま4歳。余命16年のうちに86歳で、その孫の20歳の成人式を見るのを楽しみにして、さらに余命があれば、88歳の米寿を迎えることとしよう。

古希を迎えて思うことをここに綴りました。皆さん、いつまでもお元気で。

補聴器とホシキ

香 霜 小太郎

老年になって身体のあちこちに故障が目立つてきた。とりわけ耳がこわれたのがなんともつらい。「こわれた」というのは耳が遠くなつたというだけではなく、たとえばドレミの音程のちがいが微妙にわからなくなつてきただことだ。耳鼻科に行つても、別に治療するところはなくあとは補聴器屋と相談してくれという。

ところがその補聴器がまた曲者（くせもの）なのだ。補聴器をつけてもぼくの場合だとえばテレビでは、訓練されたアナウンサーの声はわかるけれども、ドラマの早口のしゃべりには半分もついてゆけない。

い。音量は十分だが明瞭性に欠けるのだ。そして

ちばんつらいのは、ぼくの唯一ともいえる趣味の楽器とか歌とかの音楽関係がまるきりダメになつたことで、合唱団もとうとうやめてしまつた。

でもこうなつた以上やむをえない。気を取り直して補聴器と根気よくつき合い、余生を生きてゆくよりほかないと覚悟した。

補聴器をつけてもの想いに沈んでいるところに親友がきてこう言つたものだ。

「おや、おまえはどうとう補聴器をつけるようになつたのか。そっか。」
その言葉に憐れむような響きを感じたぼくは思わず言い返した。

「そういえばおまえのホシキはもう少し上等のものに替えたらどうだ。」

「ホシキ？なんだそれは…どういう意味だ。」

「補聴器が聴こえを補う器具なら、見るのを補う器具の眼鏡（めがね）は補視器だろう。」

親友はぼくの気分を察して早々に立ち去つたが、そこではぼくはあらためて考えた。英語では眼鏡（めがね）のことを eye aid instrument でなく glasses

といふようだ。

この glasses を先人が眼鏡（めがね）と訳した由來は知らないが、補聴器にも眼鏡（めがね）のようなく普通の呼び名が生まれないものだろうか。ear aid instrument を「補聴器」と直訳しただけではあまりにも無機質的で味気ないではないか。たとえば、「耳音」（みみね）とか（みみーん）とか、眼鏡（めがね）と同様に一般の意識に溶け込むような愛称ができるれば、また補聴器への感じもちがつてくるのではないか。

不肖老生、これから生涯世話になる（みみーん）になり代つてご提案申し上げる次第です。

幸わせな結婚

加 藤 寿 子

前々回の「文芸ふじさわ」に高校生の方の結婚についての随筆が載つていた。興味深く読ませてもらい、作者の純真さが印象に残つた。私は無為に過ごしていた十九歳の時、父から、「周りの皆に祝福さ

れた夫婦は必ず幸わせになれる」と言つてもらい、その言葉を信じて結婚した。

夫は五十五歳の頃、アルコール中毒になり、二度酒気帯び運転で捕まつた。うつうつとした日々が続き、上司ともトラブルを起こし、会社に早期退職願いを出した。その時に私もひとりで上司に呼ばれた。「ご主人には昼休みにいつも女性から電話が掛かってきてています」浮気相手がいるとでも言うような嫌味な色合いだった。しかし、その女性は趣味のサークルの役員で、深い関係があるわけではない。

私は、上司の言葉が悔しかつたので、帰つてから夫に問う。「上司はしつとしている？あなたは私のことを愛していますか？」夫が答えた。「男女間に愛情はないと考える。ただ仲が良いか悪いかの二つにひとつなんだよ。お前のことを愛していると思つたことはない。仮にわたしに好きな人ができたら離婚してくれるのか？」夫に合わせていればそれで良いという意味ではないのか。私は自分達の未来の鮮やかな色彩が突然消えたようで、「今ここで離婚してやろうか」と思った。しかし、「いやです。死ぬまで」と答えた。

離婚すれば、夫の運転するポンコツの軽トラックの助手席に乗り、季節ごとに移り変わる空の色を見たり、好きな音楽を聴いたりする楽しみともお別れだ。ひとりになれば、食事時間も気にせず外出できる。電車やバスを利用して、どこまでも自由に行かれれる。ひとりであつても、孤独とか淋しいとかのマイナスの感情はない。

その晩遅くなつて、私は気を取り直し他人のような声で夫にきいてみた。「また、ドライブに行つてもいいですか？」「いいですよ」と夫が低い声で答えた。「だけれど忙しい時はだめだ」と言う。酒を飲んでいるので、瞳孔が開き暗い色の目はいつもより大きく見えた。目が座り、まつすぐに私を見てくる。口を小さく結び攻撃的な表情だ。「よその奥さんいるサークルに入り、罰が当たつたんだな」夫は金属的な声で言つた。「ではサークル辞めますか？」夫は、「進行形でいく」と答えた。夫が、「もうやめようか」とかされた声を出すまで、私は「男尊女卑ではないのか」などとなじり続けた。夫婦であつても、相手の心の中には入れない。しかし、「退職を決めた時、お前の顔が浮かんだよ」

と夫が言い、「必ず幸わせになろう」と言う結婚する時の言葉を思い出した。父は、「逆に反対された結婚した夫婦が幸福になつた例はない」と言つた。

私は、夫婦の一方が死ぬまで一緒に暮らしたならその結婚は成功であり、幸わせだつたと言えると思つてゐる。

コロナ禍のこぼれ話

叶 謙二

新型コロナウイルスが蔓延する中、身近に起きたこぼれ話を拾つた。

東京の会社に勤務する次女の婿が、近頃入院した独り暮らしの母親を群馬まで見舞いに行つたところ、直接会わせてくれず映像でしか対面できなかつたとほやいでいる。そのことは凡そ覚悟していたようだが、輪をかけて困惑したことがある。母の入院手続きをしてくれた近くに住む祖父にお礼かたがた書類を貰おうとしたところ、直接会つてくれない。電話で話し合うだけで書類は母親宅の郵便ポストに入れられたと言う。この地区に住む人は東京の人を恐れている。

長女の婿も同様の目にあつた。長野に住む父親が急病で緊急入院したので見舞いに行つたところ、やはり会わせてくれなかつた。母親に状態を聞くだけですごすご帰つてきたのだった。そして悲しいことに、数ヶ月ほど経つて訃報が届いたのである。親の死に目に会えずあの世に行つてしまふとはなんと悲惨なこと。葬式の出席も婿だけに限られ、妻子でも許されなかつたのである。母親は呼びたかったようだが、周りを取り巻く人たちがそれを許さなかつたようだ。いやはやコロナはとんだことをしてくれる。ここでも東京の人を恐れている。

我が家にコロナ太りの人が現れた。本人の名譽のために名は伏せるが、お腹周りが豊かになり体型が変化した。薄着してジーパンでもはこうものなら顯著に分かる。本人は二、三キロの増加と言うが、眞実のほどは分からぬ。巣ごもりの影響だ。なにしろここ数ヶ月、好きなゴルフやテニスなど一切途絶えている。私はウォーキングとジョギングを欠かさないから現状維持。世の中には巣ごもり太りがいる

に違いない。

国民総じてマスク人間。女房は幼少の孫三人のマ

スクづくりに精を出している。色とか花柄に工夫す
るので、不評の「アベノマスク」と違い「バーバノ

マスク」は評判が良い。街中を歩く人のマスクを見
ると、色は多様化しファッショニズム化している。私にはマスク姿の若い女性は皆、美人に見えるから不思議だ。コロナは美人を増やしてくれる。

藤沢市が手の消毒に次亜塩素酸水を無料で配給しているのを知り、喜んで取りに行つた。隣の家の二軒にも譲つたのだが、後日それがコロナに効き目がないと報道された。いやはや何としたことか。

それにしてもコロナは強力で増殖能力が凄い。現れてから半年以上も過ぎるというのに人間は防戦一方。逃げ回るのも疲れ果てた。何時まで人間社会を引っ搔き回すのか。

クローバーのペンダント

からかい上手の高橋さん

朝目覚めて今日という一日をどうやって過ごそうかと思い描く。でも、このクローバーのペンダントに見覚えがない…。ほんやりお金持ちになるとか憧れの異性や女優さん女性芸能人に声を掛けられてどう対応するとか、その日ひたすら褒め捲くられるとある事を想定してみる。まあまあ考えても仕方ないとまた寝る。

あれ寝ている筈なのに…と思つては『鳴いていいとも!』にゲスト出演し、愛犬ジョンの声真似から始まって近所の勝手に命名したネコのワンドラーの声真似をして、毎朝飛来してくるハトのジョンソンの鳴き真似をして、たまに見かけるヤモリのヤハーベを捕まえ損ねて、冬なのに鳴いている蝉のチャーチルのざわざわという響きの声真似をした。これだけやつてぐつたりと思つたら、タレントのイモリン…じゃなかつたタモリさんがエジン

バラ象と南極ゴリラを迫力たっぷりのプチプテラノ

ドンの声真似を披露してくれたのでわたしは気持ちよかつた！

疲れて寝てしまつたのだが、起きたら夕方だつた。腹が減つて昨日買つておいた、のどぐろを裁こうかと思ったが面倒になりそば粉を硬くして伸ばしてそばにしようかとおもいつつ面倒で…コーヒー豆で納豆や豆腐を作ろうとは思つたが、また今度にという事にした。節分の豆で…それは縁起が悪い…よし出前を頼もう！

〔えつと注文ですが、アラスカの氷のかき氷の生

ビールがけ、それと神戸牛のミルク、仙台牛松島牛

但馬牛のミックス丼それから世界中のフルーツ盛り

合わせをお願いします〕：何時間経つても来ない：

その間にねこのワンドホーに餌をあげて、TV番組

のETC中継を何となく観て地方の駅舎中継を観た

りした。：兎に角外野席から、内野席、バッケネツ

トの席に人がいない。こんな誰が観るんだろう。

まあなんとなく観てしまつた。どの席も座るセルフ

イがないから、なにげない行動も目立つ。わたし

ものんびりと〈ガリボテくん〉を頬張つていたら、

映像として残されていただろう。

結局注文が届いたのは深夜だつた。警官のコスをした人と共に【お食事処フランソワーズ】のカゴが届いた。開けてみてがつかりしたのはカキ氷の漆黒のお洒落な皿にはシロップだけ残されていた…うそん楽しみだつたのにい。まあいいか。こっちのミックス丼はどんなお味だろう。袋に美味しそうな牛肉たちが閉じ込められている。別の袋にはたれと葱が入つている。ご飯が乗つている器にお肉とたれと葱を乗せる。うん食べる前から美味しそう。

箸でつまんで分厚い牛達の味を堪能してみる。：

舌の上で蕩けていく…程よい割合で分配されている

脂身も絶妙な味を形づくつていて。生きていて良かつたと思わせてくれる旨さだつた。それにしても時

間掛かりすぎる…夜中の2時か。ゼロ分から、一分、

二分へ時間旅行。

パンにまつわるお話

川 島 美智子

ここ数年パンブームです。市内にもパン屋さんが増えていきます。小さなパン屋さんも多く、食パンをメインに売るお店、カフェを併設したお店など個性的です。

私が初めてパンを作ったのは二十三年前です。当時はパンに関する本や雑誌も今ほど出版されていませんでした。友人に誘われて自宅でパン教室を開催している先生に習う事になりました。自分がパンを焼くなんて夢にも思いませんでした。

握力のない私は、パンの生地をこねても力が足りず先生に手伝つてもらつたり、成型も粘土細工のように難しかつたです。

それでも、強力粉、イースト、塩、砂糖、ショー

トニング、水の材料でだんだん生地ができあがる工程に感動しました。二倍にもパンの生地がふくらむ発酵も驚きです。やわらかい生地の感触も気持ち良

く、伸びる生地もおもしろいです。オープンの中で焼けるパンを先生と生徒さんと一緒に待ち、湯気がでる焼きたてのパンを食べた時は幸せな気持ちになりました。

いつのまにかパンのマイブームも去り、パンも焼く機会も減りました。でも最近時間もできて、自転車でパン屋さん巡りをしているとパンが焼きたくなつてきました。自宅で焼くパンは少量でシンプルなパンです。

パンにまつわる絵本も集めていて、藤沢在住だった加古里子さんの「カラスのパンやさん」、イギリスの絵本「パンやのくまさん」も好きな絵本です。これからもパンのある生活を楽しんでいきたいです。

レンゲショウマ（蓮華升麻）

神 戸 ゆかり

どんよりと曇つた、梅雨時の薄暗い林の藪に、白く小さな花がホワッと浮いているように咲いています。大きさは3~4センチ。色は白と思いきや、実

際はごく薄い紫だった。花芯のまわりに青紫の円を描く。ちよつとトケイ草を思い起こされる。下向きに咲く姿は薄暗い藪の中で、仄かな明りを灯す提灯のようだ。とても可憐でやさしく美しい。花の名前はレンゲショウマという。今日初めてその名前を知り、姿を見る。

ここは藤沢市遠藤にある「えびねやまゆり園」という山野草園だ。数日前やまゆりを観にきたばかりだ。

そして今日はレンゲショウマをSさんと観にやつてきた。やまゆりのようにも艶やかではないが、なんとも可憐な花だ。蕾がまたかわいらしく、指先くらいの大きさでコロコロと丸い。田中澄江が奥多摩の御嶽山に咲くこの花を紹介したところから、全国的に知られるようになったという。年配の女性3人が、一眼レフの高価なカメラを三脚に据えてレンゲショウマを撮ろうとレンズと格闘していた。

野草愛好家というほどの者ではないが、今の私は園芸種の花より、山野草の花に美しさを見出している。一緒に来たSさんと私は、レンゲショウマを十分鑑賞してやおら周りを見回した。すると、そこここに咲く白く粒々とした花に気づいた。ヤブミョウガ

(藪茗荷)という。やはり初めて知る野草だ。今、この2種類の白い花が、この野草園では目につく。名前は知っていたが、実物を見るのは初めてのキツネノカミソリのオレンジ色が鮮やかだった。ノカンゾウをわざわざ植えてある一角があつた。たぶん来年株分けをして、野草園のあちこちに植えつけるのだろう。ノカンゾウは日光キスゲにそっくりだが、雑草の身分にされている。何故?

野草園では所々に野草の名前の札が目立たないようにあるので、花の名前が覚えられる。その度に一つ得をしたような思いになる。

やまゆり園は3月から9月およそ半年余りの開園期間らしい。

おねだりしたいことがある。秋の七草をまとめてではなくまばらに植えてもらえないだろうか。そうしたら宝探しのように秋の七草を探し出す楽しみができる。せつかくハギもオミナエシもあるのだから、キキヨウ、クズ、フジバカマ、オバナ、ナデシコを加えて秋の七草探しというのも一興ではないだろうか。

人生一度の富士登山

小 池 貴瓊子

幼少時、私の生家は田舎で自宅の前は、一面畠ばかりで、従つて見通しも良く、遠く富士や大山が一望に見渡せて、子供乍ら、富士山の頭に雪を被つた姿が得も言われず美しく見えていつも／＼憧れを抱いていた。

その富士山に今は亡き父が50代の頃（昭和38年7月半ば）娘二人を伴れて登ると決行した。未だ私は21才妹は20才の若さで元気だった。国府津から御殿場へ出て御殿場から富士新二合迄バスに乗り、いよいよ登山道に入った。所が父は道を間違えて、私達の登山道は、當時頂上の山小屋へは馬の背に荷物を載せて運ぶ仕事の人方が歩く道で、道理で馬の糞が所々に落ちていた。馬方の人に注意されても、父は頑固で「いいんだ、／＼」とそのまま進んだ。途中七合目の山小屋に一泊、その時のカレーライスのうまさは格別。その夜は疲れてすぐ眠りについた。

翌朝又頂上目ざして三人は、登り始めた。いよいよ頂上に登りつめる頃は、若くか弱い女性が高山病に罹り倒れて座り込んでいた。胸つき八丁どうにか乗り越え山頂に辿り着き、父は体力の弱かつた妹におハチ回り（火口の周囲一周）をするが「お前はこ、で待つていろ。」と言つても妹は独りが不安で一緒に行くと付いて來た。富士山頂の烈風は地上で吹く風とは全く違う怖さ冷たさがあり途中谷底が見える怖い所があり、吹き飛ばされそうになり、這いびり／＼やつと乗り越えた。チビの私は体重40キロ一番先に早く歩いて少し休もうと大きな岩に腰かけていたら、若い男の人が（グループの中の一人）「娘さんもう一生会えないね」と声をかけて來た。父にあとで話すと「全くその通りだね。」とうなづいた。あの時私に「もう一生会えないね。」と声をかけた登山者の男性は今どこでどうしているのかと、ふと思ふことがある。まだ21才だった私よりは年上の筈だから、いいおじいちゃんとして元気に生きていらされることでしょう。

帰り路は砂走りを下った。砂走りは急斜面で父が「体を後ろに反らせて歩け」と教えてくれたのを無

と希うのみの昨今の私です。

閑日月閑語

近 藤 拓

コロナ禍での日々の一端を綴つてみた。

緊急事態宣言が出たのは4月7日であった。一世帯当たり2枚のアベのマスクが届いたのは6月10日、特別給付金申請書が来たのは6月1日で銀行に振り込まれたのは7月13日であった。行きつけのコーヒーカフェは4月9日から5月末まで営業自粛し6月1日再開した。もつとも、私は外出を控えるよう言われなくとも、坐骨神経痛のリハビリと高血圧の治療に行く以外出歩いていない。「超高齢毎日不用不急也」と言う川柳が、ある新聞に載っていたが、まさにその通りに過ごしている。

そんな或る日、朝刊を取りに玄関のドアを開けると、老鶯の鳴き声がした。驚いて見上げると辛夷の枝に一羽いた。鶯は庭によく来ているが、自動車の仮免運転中みたいな声ばかりで、完璧なのは久し振つづけなく消え去つて了つた。どうか安らかに／＼

胸の前にあり、どこ一つ痛みもなくケガもなく無事だったのは奇跡的だ。下から登つて来た外人二人が「あの転び方なら大丈夫」と日本語で話していたといふ。父はなまじ英語で「ホワットタイムイズイットナウ?」と訊ねたら、日本語で教えてくれた。三人で何とか無事に麓に辿り着きバスに乗り込んだが満席で、妹は靴が合わず足に血まめができて泣いていたら、若い元気な女性が席を譲り座ってくれた。21才の成人になつても、私はまだ心も体も小さな子供と変わりない一面があつた。あの日は好天でも富士山頂の風の地上では味わえぬあの異様な空気を含んだ風の強さは不思議に記憶に残つている。又当時50代の若く元気な父は既に亡く、「130才迄ガンバルゾ」と豪語していたが、97才8ヶ月の生涯をのちの世に残してゆく者への苦労と未練をこの世に残しつつ儘なく消え去つて了つた。どうか安らかに／＼

そんな或る日、朝刊を取りに玄関のドアを開けると、老鶯の鳴き声がした。驚いて見上げると辛夷の枝に一羽いた。鶯は庭によく来ているが、自動車の仮免運転中みたいな声ばかりで、完璧なのは久し振

りであった。

私はシャンソンが好きである。そこで、ただ聞いているだけではなく、ちょっと調べてみようと我がデータベースをいじつて見た。熱心なファンの方からすれば大した事ではない。手持ちのCDから250曲450人でどんな曲を何人が歌っているかである。多い順に上げると「枯葉」がダントツの13人次いで「バラ色の人生」以下「聞かせてよ愛の言葉を」8人「待ちましょう」7人で、意外だったのは「愛の讃歌」の5人であった。「枯葉」については、アメリカでは最初大物歌手が歌つたがパットとせづ、ロジャード・

ウイリアムスのピアノ演奏が大ヒットし、その後多くのジャズメンが腕を振つて一大ブームとなつた。

それはさておき、このデータ表を作るにはいわゆるシャンソン歌手だけではなく、色々なジャンルを漁つている。オペラのシルビア・ゲスティ、エーリッヒ・タウバー、俳優のジャン・ギャバン、ダニエル・ダリュー、アメリカのポピュラー歌手パット・ブーンとペティ・ペイジが「枯葉」、ジュリー・ロンドンが「魅惑のワルツ」、さらにドリス・デイも「ドミノ」や「枯葉」とあるから気が抜けない。また邦題で巴里また

はパリと名の付くものが16曲もあった。

コロナ騒動でさまざまのイベントが、3密を避けるため中止になつた。その一つに「ひまわり祭」がある。向日葵と言えば、高浜虚子にこんな句がある。

「向日葵がすきで狂いて死にし画家」
これはゴッホを詠んだのであろう。それとイタリア映画「ひまわり」のソフィア・ローレンの大粒の涙である。そして、あまりいける口ではないが、到来物のひまわりの種で作った「ひまわり」と云う名の焼酎を舐めている。

コロナ禍に考えること

榊 原 百合子

今年は新型ウイルスコロナが世界中にまんえんし、恐怖を感じる日々だ。

志村けんさん、岡江久美子さんが、突然死去した。身近に恐怖をおぼえた人も数多くいた事だろう。終わりはいつくるのだろうか。日本人には世界にほこる感染症の巨人がいた。北里柴三郎だ。

ジフテリア、破傷風を治療に成功した人だ。本来

ならノーベル賞をもらうべき人間だった。私は二才で、ジフテリアにかかったがおかげで北里柴三郎の血清療法で助かつた。命の恩人である。感染症のカミュの小説「ペスト」が重版続きたそうで、本屋は喜んだらしいが…。

そのペストでも、原因はネズミであった。北里柴三郎は、日本での感染拡大を抑える為に、「一家に一匹ネコを飼おう」と、法律にまでなった。私は猫が好きな人間なので、猫も人間の役に立つた。そしてこれからだつてと思う。猫とのかかわる歴史を知つてほしいと思うのだ。

北里柴三郎はその研究を生かし、北里大学、北里病院、北里大学研究所は、日本国に寄与した。五年前ノーベル生理学医学賞を受賞した。大村智氏北里大学特別栄誉教授もイベルメクチン開発に心を尽くされた。

大村智先生は、私が卒業した女子美術大学の特別顧問である。うれしい限りである。

コロナ禍の現在、百年以上前に、世界の感染症対策に貢献した偉大なる科学者がいた事の歴史を考え

る時間も私はもつ事が出来た。

浅草の歌

佐 藤 壽 一

私も、八十代半ばとなつた。夜半、小用に立つたあと、なかなか眠れぬことがある。そんな時、昔の思い出を辿つたりしている。

月給取りの父親が、転勤が多くて、私が小学生だった六年間だけで六回引越しをし、その度に転校をしていた。最後に引越したのが昭和二十二年の二月、五年生の三学期だった。

そして住んだのが、辻堂の社宅だった。今は辻堂から藤沢の方へ線路沿いに広い道があるが、当時は、線路傍まで松林や畠があつて、線路沿いに道はなかつた。道路は南の方にあり、少し遠回りになるから、線路沿いを歩くことが多かつた。

辻堂の駅辺りから、線路沿いに十分程歩いて来るところ切がある。そこで道に上り、左折して北へ向かつた右側に、四軒長屋の社宅があつた。

東海道線には、まだ湘南電車は走っておらず、機関車が客車を引っ張っていた。客車の出入口の上には、OFF・LIMITSと書かれていた。

その社宅から、北の方に三十分ばかり歩いて明治小学校に通つた。転校してきたのが、五年生の三学期だったので、すぐ六年生になつた。

この時に、教育制度に大きな変革があり、それまで小学校の六年だけだった義務教育が中学の三年までとなつた。

これを六三制といい、中学を新制中学といった。そして、藤沢では西の方の二校、明治小学校と辻堂小学校の卒業生が、新設の明治中学校に入ることになつた。然し、校舎はまだないから、両校の卒業生は、新校舎が出来るまでの一年間、夫々の母校で授業を受けることになつたのだつた。

そんな六年生だつた夏休みに、戦時中、上海の社宅で親しくしていたKさんから、お誘いがあつた。Kさんは家族を田舎において、京橋の会社の近くで間借りをしていたのだが、上海で仲良く遊んでいた。私の一つ年上の息子さんが、夏休みで出て来るから、来ないかというのだ。それで、喜んで出掛けた。

Kさん手作りの夕飯をすませたが、夏のこととて、外はまだ明るい。映画でも見るかと、地下鉄で銀座に行つた。築地の方へ向つて歩き、当時は下を川が流れていた三原橋を渡つて前方を見ると、真赤な夕焼の大空を背景に、東劇の建物が黒々と聳えていた。その劇場で見たのが、シミキン主演の喜劇映画「浅草の坊ちゃん」だつた。そして、その主題歌が「浅草の唄」で、今や、私のカラオケでの愛唱歌になつてゐる。

強いばかりが 男じやないと

いつか教えてくれた人

どこのどなたか 知らないけれど

鳩と一緒に歌つてた

あ、 浅草のあの歌を

新型コロナウイルス下の漢方薬と薬膳

瀧 谷 恵 子

私達は、新型コロナウイルスと言ふ今まで経験した事のないウイルスと向かい合う毎日を送っています。

春の頃は、聞き慣れない新型コロナウイルスと言う名に戸惑い、どうやら恐ろしいウイルスであると理解しました。

漢方薬や最近、薬膳を学び始めたので、初期の発熱時すぐの治療に、不安を覚えました。早く、治療法が見つかれば良いがとの思いでいっぱいになりました。

インフルエンザで（抗ウイルス薬が使えない時）漢方薬を小児等に使える事は広く知られています。

インフルエンザとはウイルスが違いますが、新型コロナウイルスでも、初期であり、症が合えば使える漢方薬があるのではと思います。元来、漢方薬は傷寒論の序文にある様に、その時代の医療では治せない病（腸チフス等）で、著者の親戚二百人の三分の二が亡くなってしまった。その病を治したいと言うところから始まっています。風邪の初期を治すと一緒に、漢方薬で、新型コロナウイルス初期に対処出来たらと思いました。

また、薬膳的に、免疫力を上げる事は、十分な睡眠や、バランス良い食事、体を冷やさない事と言われます。

薬の代用にはなりませんが、免疫力を上げる事でウイルスに打ち勝つ体を作る事は、大切だと思います。

昔、中国では、食医が医者の中で一番位が上であつたと聞いてびっくりすると共に、納得しました。

バランス良い食事とは、旬の物、地元で採れる物等をバランス良く食事で取る。また、体を冷やさない様にする事は、暖かくすると言う事と、体の中から食物によつて、温める事が出来ます。これから、寒くなるので大切と思います。

主に、暑い所で、採れる食物は、体を冷やし、寒い所で採れる食物は体を温める物が多いと言われます。冷やす物ばかり食べる事に傾らない様に食べる事が良いと思います。

自粛期間を過ぎて、県外に出る機会があり県について、新型コロナウイルスに対する人の感じ方、対処の仕方がかなり違う事に気が付きました。細心の注意を払つて行つた長野県は、確かに、人が多い所はありましたが、皆殆どの人がマスクをして、最善の注意をして生活している様に思えました。私達も、慣れ過ぎてしまわない様に、マスクや嗽や、手洗い、ソーシャルディスタンスを忘れないで

居ようと思いました。

今冬また、感染者が増えるのではと言われますが、これらの場合で、昨冬インフルエンザが大幅に減つた様に、新型コロナウイルスの感染も克服出来る事を願っています。

また、ワクチンの完成も、願つてやみません。

白神山水の鮎

島田成夫

(文芸光風)

秋田県藤里町の友人からずつしりと重い荷物を受け取った。前日電話があつて、「午後冷凍便」で送ります、とのことだつた。荷物をほどくと、あきたこまち・白神山水・秋の山菜そして天然の鮎が入っている。鮎は一匹ずつビニールの小袋に入れ、更にジップロックにいれて丁寧に新聞紙で包んである。「半年以上冷凍保存出来ます」。保存や焼き方の注意書きも添えられている。新鮮な天然鮎を冷凍してしまうのはもつたいない、とその日と翌日は塩をたつ

ぶり振り、弱めの火で焼いた。川魚だけど臭みは全くない、丸々と太つた鮎にかぶりつく、旨い。天然の鮎は何年ぶりだろう。退職後宮城県白石市に帰郷した際、高校時代の友人が釣りたての鮎を焼いてくれた。連れ合いは子どものころ食べたかも知れないけれど記憶はない、といつもは避ける内臓や皮もそのまま食べている。川の岩に付いた苔だけを餌にするので臭みがなく、香魚とも言われ、その年で死んでしまうので、年魚とも言われる。孵化した稚魚は海に流れて、成長し川に戻ってくるのだが、極めて希少なので、秋の捕獲した鮎の卵を人工的に孵化して育てて、毎年春頃に川に放流する。

子どもの頃大人の真似をして、「ころがし」をやつてみたが一度も釣れたことはなかった。本来は漁協に納金して鑑札を貰わないと鮎釣りは出来ない。藤里町の友人は夏から初秋の頃、川に梁をしかけ、川原にレンタルのコンテナを設置し、数日間寝泊まりして鮎を捕る。少し前には燻製にして真空パックに入れたのを送つてくれた。

今年はサンマを食べる機会が少なかつた。その代わり、天然の鮎をたつぶり食べることが出来る。

藤里町の友人とは、東日本大震災の時、福島県南相馬市小高地区でのボランティアで知り合った。ボランティアに参加している人は若者でなかなか話にくかつたが、あるとき一人多少年配かなと思える人がいた、思い切って話したことから、お互いのアドレスを交換し、メールや電話で連絡している。

何もないけど、白神山地の黄葉の中をトレッキンゲしてみませんか、との誘いで連れ合いと出かけた。藤里町は秋田県の最北端で白神山地の奥深く山に抱かれている。電車で行くと大変不便なところだ。それだけ自然は豊かで、お米、野菜を作り、春秋は山菜を、夏は鮎やイワナと自然の恵みが豊かだ。ただ冬は積雪が多く、雪かきを一度怠ると家から出られなくなるという。

藤里町も高齢化が深刻だ。友人は「元気塾」を立ち上げ、高齢化した農家の方々に農家民宿を勧めている。

自然に恵まれすぎているんだよ、と他の農村から羨ましがられるそうだ。この天然鮎も白神山水の育んだ自然の恵み、ありがとうございます。

とんだ休日

竜田孝則

狭いコクピットにもぐり込み、キャノピーを閉じると、かすかにガソリンのにおいがただよつてくる。4点式シートベルトで身体をがつちりと固定。操舵装置をチェック。動力計器、オールグリーン。ランウェイ、クリヤー。

スロットルをいっぱいに押し込むと同時に、機体は激しく身震いしながら加速する。ランウェイの末端がみるみる近づいてくる。時速九十キロ。軽くステイックを引いてやる。地表がすっと遠ざかる。視界が大きく広がってくる。雲が真横に見えてくる。目標高度到達。エンジン停止。

エンジンを切ると、風切り音だけの静寂の世界が訪れる。グライダーは鳥になる。鳥になつた機体を操つて、真つ平に広がつた雲の平原の上をすべつていく。自分も鳥になる。

今よりもう少し若かつたころ、月に一度はこのよ

うな休日を過ごすことが多かつた。

しかし、空の上とはいえ、ケータイという無縁な代物の普及とともに、下界の出来事が空の上にまで追いかけてくることが多くなった。

「あのう、今どちらにおられるんですか」

「今ねえ、いろは坂の、ちょっと上なんだよねえ」と、わたし。

「はあ？ 華厳の滝ですかあ？」

「いや、もつと上」

「はあ？ もう、どこでもいいですけど、お帰りはいつごろでしようか？」

「風の向きによるよね」

「はああ？ 風の向きい？」

こんな珍妙な会話を交わしているうちに、たいていの相手はあきらめてくれるのだ。

七十歳の私から

土屋けい子

私は一九五十年生まれなので、七十歳になりました。子供の頃、七十歳と聞くと亡くなっている人も居ましたし、存命でも腰が曲っていたり、歯が抜けたりして、お年寄りと思っていました。七十になつた自分を見つめみると、気持ちは変わらないつもりでも、やはり心身の衰えや低下は否めず、加

つぎにわき上がつてくる。

実現できるかどうかわからない夢に向かつて夢中で駆け回つていたあの頃が、かけがえのない貴重なものに思えてくる。

夢が実現できたから幸せなのではない。夢見ることができること、そのものが幸せなのだ。夢見る少年だったあの頃、すでに幸せだったのだ。今どきの子ども達は幸せな夢を追えているのだろうか。人生に二度とない珠玉のような日々を存分に味わつてほしいものである。

えてコロナによる不安一杯の自肃生活で、一層生活の質が低下しました。

でも或る日決心しました。一度しかないこの日・この年をもつと大切に過ごさなくちゃ。

早速、中断していた早朝散歩とラジオ体操を再開しました。硬い身体が温まりほぐれて来ると、心も柔らかくなります。

微妙に移り行く暁の空・風の戯ぎ・草木の緑・お馴染になつた方との朝の挨拶、おはよう！の響きの中に、互いの元気を確認し、安心と今日一日のパワーを貰う大切なひと時。

私は保育士で、退職後は地域でお話会やわらべ歌で遊ぼうの会に携わり、沢山の親子と触れ合つてきましたが、コロナで全て中止。私の予定表は真っ白で、暫くは何をして過そうか……悩む日々でした。

或る日沢山の折紙を見つけ、早速座布団折りで独楽を作つてみました。先を抓んで回すと回る回るクルクルと。世の中も良い方向に回れーと願いを込めて、折り続けています。

二つ目は十二色の紙を差し込んでの十二角玉。掌の上で転がすと、カラフルな世界が広がります。中

に鈴を入れ振つてみると、優しい音色が聞こえます。そこで、透明な袋に入れ、リボンを掛けて「幸せの鈴リンリン」と名付けました。楽しい事や嬉しい事、寄つておいでーと、呼び込んで欲しいな。

再び子ども達と会えた時「又会えて嬉しいね。」の想いを込めて、独楽と十二角玉をプレゼントしたいのです。

更に、私が夢中になつてている事にオカリナが有ります。友達と組んで月二回レッスンを受けています

が、奥が深く課題は山積。

先生は若い方ですが、いつも穏やか、でも音程やリズムは元より、他パートとの連携や曲の表現等、丁寧に厳しく指導されます。

私はテンポの速い曲が苦手で、緊張すると音程もリズムも不確かになり「もう一度」のダメ出しが続きます。肩に力が入り溜息が出そうになりますが、先生は私がやれる！と信じていらっしゃると思い直し、練習を重ねます。「合格です。」の声に、思わず「ヤツターノ」と叫んでしまう私ですが、何歳になつても夢中で取り組める活動が有り、切磋琢磨しあえる友や、素敵な師に巡り会えた私は、幸せなのだと、

しみじみ感じています。

月の綺麗な今宵、彼方の両親に届けと、祈りを込めてオカリナを奏でましょう。

「お父ちゃん、お母ちゃん、けい子は七十歳になつたよ、元気でいるからねー。」

曲は母の好きだった♪川の流れのように♪

鵠沼の東屋の歴史

富 安 千鶴子

鵠沼は、明治中頃開発が始まり、大正の頃は数多くの文人墨客がいききした。その逗留先は「東屋」である。しかしその中心にあつた「東屋」は今はない。しかし、しかし松風の音は、かわらず今も秋隣の中聞こえる。鵠沼の風景、建物、門柱、径などが小説の中や絵画の中にうめこまれ、生き生きと存在感を示している。志賀直哉の「鵠沼行」では、鵠沼に降り、人力に乗り、砂地を歩く、「東屋」に着いて二階から江の島がみると、武者小路実篤は「東屋」にきて、「気に入つてゐる、仕事をしてゐる」と。

谷崎潤一郎は「東屋」にて半年間逗留した。芥川龍之介も「東屋」で病氣療養をしてる。里見弔、齊藤茂吉、土屋文明、日野耿之介、久米正雄、吉屋信子、宇野浩一、大杉栄などなど、「東屋」に足を運んでいる。岸田劉生は肺結核の病氣療養の為鵠沼の地に移り住んだ。現在の地名では松が岡三丁目あたりらしい。しかし、しばしば、「東屋」に通つていたらしい。数々の名作を生みだした。「麗子像」の数々だ。そして、何枚もの「鵠沼風景」だ。後に満州に行つた折も、鵠沼の地を思いながら、満州の風景を画いたと聞く。

芥川龍之介が、昭和二年一月鵠沼の地を去り、東京田端の地へ戻るが、その年七月自殺する。もしも、鵠沼の地にそのまま、とどまつていられたら、死をさけられたのではと思うのだが。数々の舞台となつた「東屋」、そこに、つけ加えなければ、と思う人物がいる。「知られぬ日本の面影」著の小泉八雲である。八雲は江の島の魅力を海に囲まれたお伽の国のベールをへだてて、その島にふみいり、信仰の莊嚴味ある日本の美しさがあると、絶賛する。その江の島の見える鵠沼の「東屋」に逗留している。明治三十一年の事である。次年も、八雲は子供達をつれて、「吾

妻屋」に三週間も逗留し、鵠沼海岸にて海水浴を楽しんでいた。貝を拾つたり、蟹を捕えたり、砂丘を築いたり、愉快に遊び暮らしたと。「吾妻屋」とは「東屋」である。作者によつては、「ひらがな」や、「東家」と記す事もある。江の島で買った貝細工を好み、「東屋」の二階からの江の島を楽しんでいた様子である。

世界に名をはせるイサム・ノグチの父親である野口米次郎は言う。

「八雲は作品の力で人間生命の発達を助けている」とそして、「八雲の文章は、百年後も、二百年後も、生きるであろう、そして永久に死がない」と。野口米次郎は名詩人である。

私は思う。小泉八雲は日本の歴史のロマンが、高い芸術性を思わせ、他の追随を許さない傑作だと、文学的詩情をもつて示してくれた。天才八雲が、この鵠沼の地に、そして、「東屋」に逗留していた事を誇りに思い、その、足跡を、八雲生誕一七〇年の今年に、私は、「東屋」跡と、その周辺を、そして鵠沼海岸を散策してみた。柿の葉が色づき、はぜの葉の赤色が眼にしみた。

雪の夜

中田 勇
(湘南絵本づくりの会)

雪の夜、暗い台所でゴキブリの親子がよろよろ歩いています。「お母さん、おなかがすいたよ」「もう少しのしんばうだよ。」

「ただいま」下のお姉さんが帰ってきて、すぐにはガスレンジで湯をわかしはじめました。

「みんなおいで」お母さんは子供たちをガスレンジのすき間から中のくぼんだところへ案内しました。「うわーあつたかい」ガスレンジのくぼんだところはとても暖かく、子供たちは元気になりました。

「お母さん、おかしが食べたい」「ちょっと待ちなさい」お姉さんがこぼした砂糖を拾つて食べました。
「みんな、よくお聞き。ここはとても暖かい。でも、あんまり暑くなつたら、さつき入つてきたあのすき間から逃げるんだよ」「はい」

「ただいま」こんどは上のお姉さんが帰つてきて、

冷蔵庫から大きななべを出して、ガスレンジにドカンとのせ、火をつけました。

「お母さん、すごく暑くて苦しいよ」大変です。なべの重さで、すき間はせまくなっていました。

「子供たち、急いで」お母さんは子供たちのお尻を押して、すき間を通してやりました。「お母さんも早く逃げて」子供たちはさけびました。

「どうしよう。どうしよう」お母さんはガスレンジの火の周りをぐるぐる回りました。それから、さつき子供たちがやつと通れたすき間に頭をつっこみました。「うわっ、熱い」お母さんは足をばたばたさせ、すき間にもぐつていきました。

「よいしょつこらしょ」子供たちは一生懸命、お母さんのひげを引っぱりました。なべが少し傾き、体がおもちのように、にゅーっと伸びました。お母さんが通りぬけると、なべがドシンと元へもどりました。

「良かったね、お母さん」「よかつたね、みんな」「お

母さんの羽、こげてぼろぼろだよ」「なーに、大丈夫よ」お母さんはこげて短くなつた羽を、無理に足で伸ばそうとしています。

「何だか騒がしいわね」二人はガスレンジにゆっくり近づいていきました。「え?これ、全部、ゴキブリ?」二人は抱き合つてキヤーと叫びました。

短詩の世界を愉しむ

新田自然
(文芸光風)

俳句に「卯の花腐くし」という季語がある。梅雨より少し早い雨だが、卯の花を腐らせるほどの長雨のことをいう。一七文字という制限のなか、長々しく、大袈裟な言葉で時の雨を飾る、その遊び心が楽しい。ひと日臥し卯の花腐し美しや 橋本多佳子

きょうは雨、あじさいのうすい水色、やまぼうしの白い花、それらを包み込むように細雨が降つてい

る。とりわけ額あじさいがいい。少女の首の回りを

飾るリボン、こんぺいとうの星形、隅田川の花火、みんな水色。季語には「額の花」ともある。

人力車似合ふ街あり額の花

卯月のころ、沖に立つ波を「卯波」うなみという。

あるときは船より高き卯波かな 鈴木真砂女

安房鴨川に育つた真砂女は幼い時から海に親しんだ。波が立つ日は風がある。沖ゆく舟が波に見えた

り隠れたり、彼女は自らの人生を波に見立てた。五

一歳になつて、それまでの大きな旅館を捨て、銀座に小さな店を持った。店の名を「卯波」とした。まさに無一物の出立であつた。小柄で可愛いおばあちゃん、名物アジの叩きあげは美味であつた。九〇歳を超えてみずからを振り返る自伝「銀座に生きる」を上梓し、九六歳で亡くなつた。書かれた恋の思い出は遠く切ない。

ひとの恋あはれにおはる卯浪かな

安住敦

絵にも鮮やかである。

一九一二年五月、鉄幹の後を追つてパリに着いた晶子は、燃えるようひなげしの野に立つた。

ああ臯月仏蘭西の野は火の色す

君も雛図栗われも雛図栗

与謝野晶子

わが国ではヒナゲシ、フランスではコクリコ、中国では虞美人草、スペインではアマボーラ、アマボーラのメロディは、あまくて、なぜか恋の匂いがする。

かの時の我がとらざりし分去れの

片への道はいづに行きけむ

美智子上皇后

「分去れ」とは、この地方の言葉で別れ道、軽井沢の外れにあるここで中山道は北国街道を分歧する。美智子さまが皇太子殿下と運命の出会いとなつた軽井沢、「あの時もし別の道を選んでいたらどうなつていただろうか」

この思いは、長く人生を送つてきた人には誰にも去来する思いである。

早春の南房総、ストックやボピーに彩られる千倉に遊んだ。ボピーの、あの燃えるような赤はモネの

短い言葉に読み取る深い意味、俳句や短歌、短詩は強い表現力となつて読む人に迫る。

鑑賞したり作ったり、こんなに身近で楽しめる文芸はそう多くはない。

幸せの白いスズメ

ネコスケ

私の家の本棚に「文芸ふじさわ」が三冊並びました。皆さんのステキな作品を読むのが楽しく、また勉強にもなります。

作品の中には引地川親水公園の散歩の事を書かれる方も多いいらっしゃいます。健康のため、自然を楽しむため、コミュニケーションの場としてなど、皆さんの目標は様々なようです。

私の場合、散歩歴は十年以上ですが動機は会社のウォーキングラリーに参加した事なので、皆さんと比べると安易なキッカケです。歩数計がUSBメモリになつていて、歩数をパソコンに記録すると順位表示やポイントの付与などの特典があります。

仕事をしていた頃は、日常生活の中でいかに歩数を稼ぐかが課題でしたが、退職後は気持ちに余裕が

出て来て、散歩を楽しめるようになつてきました。春から秋の間は親水公園を、朝歩くように心がけています。同じ時間帯を歩いている方々との挨拶から始まり、ヤマモモが食べ頃になつた事、田んぼにキジが来ている事など今まで気付かなかつた事もたくさん教えて頂きました。

そんな親水公園近くで白スズメが見られるというニュースを見ました。後日、見に行つてみると、数羽のスズメの中に真っ白なスズメを見る事ができました。仲間のスズメたちと一緒に白い羽根を大きく広げて飛び回っていました。同じく見に来た方が「めつたに見られない幸運のスズメだから、何か良い事があるかもしねえね。」と笑顔で話して下さいました。

確かにその日以降は、何度同じ場所に行つても白いスズメの姿を見る事はできませんでしたが、小さな幸運は訪れました。くじ付きの商品券を夫と購入したところ、二人共お米が当たつたのです。さらに続いて雑誌の懸賞でお米券が当選し、驚きました。お米といえばスズメ？無理なこじつけですが、くじ運の悪い私にとつてはちょっとラッキーなでき事で

した。

そしてさらに嬉しい事もありました。親水公園の散歩中にお会いして「文芸誌の原稿を書いてみたい」と声を掛けて下さった方との再会ができたのです。何を書いてよいのか分からなかつた私に、アドバイスやヒントを丁寧に教えて下さいました。私と「文芸ふじさわ」の縁結びのような方です。しばらくお会いできずに心配していましたが、お元気な姿を見る事ができて安心しました。

コロナ禍の中、白いスズメが運んで来てくれた小さな幸せに感謝したいです。

SNS未経験者のFacebook体験既

野 口 翔 平

Facebookを活用し始めて、約三ヶ月になる。元々ウェブでアカウントは作成済みであったが、アプリをインストールすると、思いのほか使い勝手が良かつたため、活用するに至つた。アプリをインストールする契機は忘れてしまつたが、何か理由があつた

はずである。現実世界で他者からアプリの存在を紹介されたわけではないので、Facebookがオンラインであるとすれば、オンラインを活用していく過程で発見した結果に相違ない。使い方にも徐々に順応してきたが、オンラインが現実世界と対比され得る社会であると仮定して、現実世界に生きていたながら、そこには未だ知ることのない世界が数多存在することを考慮すれば、SNS初心者の僕にとって、オンラインにも現実世界と同様に未知の世界が広がっているであろう。

僕は元々SNSに疎遠であり、SNSは現在Facebookのみを活用しているが、Facebookを活用していると現実世界先行で知り合い、Facebookでも友達になるという経過をたどつた人であつても、数回接触した人程度の場合、活字と實際の現実世界での相手の印象に差異が生じる場合があるという感覚を抱いている。僕も他者からはそのように思われているかもしれない。

それは恐らく、SNS情報の過多と現実世界での過少な情報の懸隔に起因するのであろう。文字通り活字が活用されるのである。要するに、現実世界の情

報が過少であり、その人柄の認識が不足しており、SNSから判断し得る人柄に偏りが生じているのである。言い換えれば、SNSで窺える過多情報に現実世界が一致するほど、現実世界においてその人のことを認識し得ていないのである。SNSの過多情報と現実世界の接触で認識し得る情報との差異もまた、それでも友達という呼称が通用するSNSの利点を考えれば、仮にSNSと現実世界との統一を試みても、SNSと現実世界を対比すれば、他者と接触していないう時間の方が長期的となるSNSの方が情報過多になり、そこでその人に関する未知のパーソナリティの断片が生じ得るのは必然的である。

これは僕が未体験のTwitterやInstagramなどの他のSNSでも同様であろうか。今後これらの他のSNSを活用するか否かは未定であるが、現実世界で未知の世界が数多存在することを考慮すれば、思いのほか使い勝手が良かつたアプリがFacebookの世界への導入となつたように、ほかのSNSを活用しても、未知があつたものは既知に転換し、それは自ずと増えしていくことが想定される。

十三夜

畠 昌子

“チビピーとピーちゃん”

雀の話は温かくていいな
何年か前からなついてしまつた雀たち。ピーちゃんと呼ぶと屋根の後ろから翔んで来る。小っちゃくてピーと鳴くから、チビピー。最後まで一階の屋根の上でパン屑をつついているから、ピーヤン。そしてもう一羽は子供か中年かわからぬいただのピー。昨日新潟から帰宅すると屋根のパン屑はいまだ残つたまゝ。やはりついて来たのだ。毎日食べに来ていたパンがそのまゝ、という事は今だに帰つてない……良寛記念館で雀の悲壮な鳴き声。魚市場でピーと呼んだら下まで下りて來た。バスが発車すると並走雀三羽はしるはしる。新幹線を追いバスを追い。誰か雀の事詳しい人いないかしら。最近鳥の羽根のつけ根に特別なホルモンがあつて永く翔べるという話？
そう言へば宿の窓ガラスに白いツバが、いつも家

の車につけられて「又つけられた」と娘が言うあの白いよだれツバだ……。父母の魂が心配して就いて行くのでしょ。と娘 そんな事……。ただただ泣ける。

平野友輔 — 夢の跡

深谷滿彥

綱島の病院にいとこと叔母を入院させた。ある日食べ物は禁止されているが、どうしても乾瓢巻きが食べたいと言う。駄近くに車を止め作りたてといふ海苔巻きをしつかり持つて病室へ、叔母は病室は離れているが娘と一緒にいう事で案外ほがらかである。看護婦さんにみつからないで本当に大丈夫なの……根本さん姪ごさんさん来てくれてよかつたね……振り向いた私と海苔巻きを飲み込んだ叔母。嘔せて咳き込む音。すみません、すみませんと私。何日か後、誤嚥性肺炎で叔母亡くなる――。危めたのは私――。

遠くに富士山を望みながら、自転車を走らせた。善行から長後までは直線で5キロ。周囲には田園風景が広がり、鉄塔がどこまでも連なつている。

藤沢の「ふじ」は富士山の「ふじ」か。風景が広がると、自然と思考も大きく広がっていく。

長後駅を過ぎて、商店街に入る。シャツターの閉まつた店の連なりの中、そこだけショーウィンドウに太陽の光を反射させている店があつた。

羽澤屋本店。レンガ作りの壁に影がくつきりと、少しいびつな矩形を映していた。

今日は十三夜――。

昌子

店内は、広々としていて、中学校の制服が並んでいた。店員の黙礼をやり過ごして二階へ上がる。背の高い、制服を着た中学生の人型が、身長を表す基準の目盛りと共に置かれていた。その最高部は、180cmとなっていた。

——平野友輔——、この名前を知ったのは、町田にあ

る「自由民権資料館」へ偶然仕事で行つた時。お客様のガイドで、何も知らずに訪れた。

資料室には、まるでロツクン・ローラーのような面構えの、自由民権運動の闘士たちの顔が並んでいた。祖父の家が厚木にあつたこともあり、これら武相の勇士の中に、もしかしたら自分と繋がる人がいるのでは、そんな夢想を持った。その中に平野友輔を見つけた。

北村透谷との関係がキヤブションから読み取れた。

北村透谷の詩を好きで読んでいた私は、彼と友輔の、石坂ミナを巡る話を知り、さらに友輔が医者として、藤沢で大成していたことを知った。

その後、私は縁あって、都内から藤沢へ引っ越しさをする。

藤沢には、平野友輔の痕跡が残っているはずだろう。インターネットで色々と検索するうちに、羽澤屋という長後の、今は洋品店になつてしまつて、老舗のはたご旅館の一室を借りて、友輔が医院を開業していたことを知った。

とにかく、その場所に立つてみよう、もしかしたら店内に、彼の写真の一枚でも飾つてあるのでは、

そんな思いから私は自転車を走らせた。

日常の風景が広がつているだけの店内をぐるっと回つてみた。白いワイシャツ、セーター、靴下、学校の行事を伝えるポスター、マネキン。友輔の痕跡はかけらも見当たらなかつた。

私は、店員に声もかけずに店を出た。見上げると太陽が眩しく、「羽澤屋本店」の文字が白い壁からくつきりと浮かび上がつていた。

わらじのひものゆるくなりぬ、
まだあさまだき日も高らかに、
ゆうべの夢のまださめやらで、
忙しきかな吾が心、さても雲水の
身には恥ずかし夢の跡。

— 北村透谷「みみずのうた」より —

藤沢市の藤本の藤（藤の縁）

藤本眞砂子

流石、藤が三拍子揃っているだけあって、今年も我が家の一階の三部屋並んだベランダの手すりいっぱいを占領した藤の花が咲き乱れ、所どころに何色かの紫陽花が顔を出していて、さながらに藤と紫陽花の競演で、通りすがりの人達の「見事に今年も、華麗に咲いたわね。」というお褒めの言葉が聞こえて来て心の底でほんわかと気持ちが良くなる。思えば、四十七年前に遊行寺の植木市で買った四十七センチ位の一鉢の植木であった。それを建てたばかりの我が家の大玄関脇に植え、二十年位前に鉄骨で棚を作つて貰つた程で、その先がベランダの柵にからみついたのだ。春夏は緑の葉が暑い日差しを遮ってくれる。秋になると、葉が枯れ落ちると、また外の景色が戻り、道行く人々の姿が目に入るようになる。この一年を通しての自然の繰り返しのおかげで、身の回りに起きた様々な思い出が胸の奥から甦る。今で

は弦が二階まで伸びて、飼い猫のミーちゃんの足場になり、一日に何回か、二階の部屋から庭迄の専用階段である。それでも、この愛くるしい藤の花には結構、骨の折れる一面がある。ほっておくと瓦屋根に食い込んでいつたり、庭のXマスローズ、えびね、バラ等の地植の上に枯れ葉が覆いつくす。毎日、大袋に一ぱいの枯葉や枝切りで腰痛になつてしまひに通うようにもなるが、こんな思いをするなハビリに通うようにもなるが、こんな思いをするならいつそのこと、業者に頼んでなくしてしまえば：とも考えるのだが、それはできない。きっと一生お付き合いすることになるのだろう。縁あって、時宗本山の遊行寺の植木市で手にいれて、いつの間にか四十七年の月日を我が家とお付き合いしてくれた大切な生き物と考えると、我が家が出来事を何でも知つてゐる様な気がしてならない。藤沢市に住んで藤の木に守られた藤本家。これが「藤」の縁というものなのだろう。今は、緑のカーテンの前で、この文を書いている。

帆船やまゆり

ベセル 敦子

一〇二〇年夏、本来なら江ノ島はオリンピック開催により大変な賑わいを見せていたはずだった。一九六四年の前オリンピック開催から五六六年、華々しいヨットハーバーになるはずだった海は、例年と比べると賑わいのない静かな夏を終えた。

ここ江ノ島ハーバーに、ひつそりと佇む木造の帆船がある。船名は「やまゆり」。東京オリンピックでは、来賓をお迎えし、警備艇としても活躍をした船だ。現在は、その保存を目的としたNPO法人帆船やまゆり保存会として、会員の方々からたくさんの方々のサポートをうけ、今も現役として帆走している。その優美な姿から「湘南の貴婦人」とも称されている。

私は、数年前からその保存を目的としたボランティアとして参加し、いろいろな行事の遂行をお手伝いしている。

晴天の元、帆をはり水面を走る木造船を想像して

みて欲しい。江ノ島ハーバーから出航し海原に出ると、天気の良い日にはその帆の向こう側に江ノ島と富士山という絶景が広がる。海原から見る富士山はまた格別だ。

いつもの陸の景色も違つて見える。腰越から稻村ヶ崎を一気に眺めることができ、江ノ電が走り抜けているのが見える。

木造船なので、維持のためには毎年のメンテナンスが大変大切なものとなる。木造船部分の痛みは毎年激しいものがあり、冬季には塗り直しなど細かな修理を行うことにしている。一度は陸に上げて船底も塗り直しをする。陸に上がったその姿は水に浮かんでいる時よりも大きく力強く見えるものだ。

オリンピック一年前の昨年夏は、セーリングワールドカップが江ノ島で行われ、世界のトップ選手が江ノ島沖でその手ごたえを確かめていた。県営駐車場は選手たちの艇庫や控え室になり、いろいろな言葉が飛び交い、洋上では熾烈な風の取り合いが行われていた。そんな中「やまゆり」も関係者などを乗せ、白熱の会場を優雅に帆走した。

実は、私は前回の東京オリンピックの年生まれな

のである。両親は当初開会式へ行く予定だったのだが、母は私が生まれ結局行けなかつたというオチもある。つまりこの「やまゆり」はほぼ同級生であり、船のことなのが古いと言わるとややカチンとくるものの、その保存に尽力をしているボランティアや会員と共に、この姿を江ノ島に残したいと願つてゐるのである。

風光明媚なここ江ノ島で、木造帆船の存在はひときわその風景に映える。時に江戸の昔から描かれた風景さらがらの様相すら見せるのだ。

年月を経てなお相模湾を帆走し、前回のオリンピックをも見守つた「やまゆり」は、再び来年開催の東京オリンピックの洋上で優美な姿を見せてくれることだろう。

孫の結婚式

堀井 寛

孫娘はスイスで高校生活を過ごしカナダの大学を卒業して日系企業のジュネーブ社に勤務する国際人であるが現地で知り合つたドイツ人の青年医師と結婚することになった。わが親族では初めての国際結婚である。

挙式の一部始終が動画でパソコンを通じて大型テレビに映しだされウエディングドレス姿の花嫁を見ることが出来て幸せであつた。

テレビに、日本側の親族の画面・ピアノの先生・ダンスの先生の画面、カナダに住む孫の親友の画面、新郎新婦の画面と四画面が同時に映し出されていて『結婚おめでとう!』『おしゃわせに!』『ありがとう!』などの賑やかな会話が取り交わされる場面もあり、9000キロ以上の遠隔を感じさせない臨場感に溢れていた。

ちよつと変わつていたのは式場に新郎の父親と一緒に大型犬が二匹参列していくて新郎も可愛がつていて犬なのだろう。

あるガーデンハウスで結婚式を挙げた。

今回のテレビを通しての結婚式への参加は自分にとつて全く斬新な経験であった。同時に新しい生活様式の一部を体験させてもらった。

終息の目途が立たずに広がり続けるコロナ災が世の中の仕組みを変え、人々の生活様式を大きく変えるだろうと指摘されている。

自動車もバスも電車も運転手なしの無人運転となり、店舗は無人で商品はドローンで配達され、勤め人は会社へは週に数日だけの出勤で自宅でのテレワークが主となる、学校の授業もオンラインで行われる、レストランで料理をはこんでくるのはロボットなどなど。

あらゆることが簡略化され便利になることは確かであろう。しかし、運転する楽しみはなくなり、買物で品定めをする楽しみはなくなり、会社の仲間と語らい合う機会が少なくなり、先生との親近感が薄くなり、雰囲気のないレストランが増えるのではないかだろうか。

新しく変わつて行く世の中の仕組みが人々の生活を「味気ない」ものにしてしまつて行くのではないだろうかと杞憂するのは時代遅れの年寄の戯言だろうか。

人生の大半を昭和という時代の流れの中で過ごした自分は、『良き時代に生きたのだ』と自問自答している今日である。

一つの言葉

松与常清

若い時に知った言葉が七十一歳の今でも頭にこびりついている。それは『音楽は天を発掘する』と『万物照応』である。私は音楽が好きでどういうジャンルでも聴くのであるが、今は老人ホームの居室でほとんど朝から晩までクラシックのCDを聴くのが常である。が、『天を発掘する』とまではなかなかいかない。もちろん『万物照応』とまでもいかない。クラシックのCDを聴くのはBGMに毛が生えたとい

つた程度のことで感動に胸うち震えるということはあるまい。それでも、『音楽は天を発掘する』と『万物照応』といった世界に入りたいとは思っている。自分だけがそういう世界に入れないので、そういう体験をなさつた方はいくらもいらっしゃるのかもしれない。音楽を通して天を発掘し得ない。万物照応を感じ得ない。それでもこの二つの言葉を体感したいと思っている。それは美しい天女のような女性よりも、いかなる美酒、美食よりも魅惑的な世界かもしれない。この世に極楽や天国を現じ得るようなものかもしれない。死ぬまではたして遭遇し得るものであろうか。『辛い時、嬉しい時、争いのさなかにも音楽は人の心に寄り添い続けました』と云われた指揮者がおられるが、この方はおそらく『音楽は天を発掘する』と『万物照応』を感じ得られた方だと思う。何よりも争いのさなかにも、と云われたところが凄い。ふり返ってみれば、私も辛い時、嬉しい時、心に寄り添ってくれた音楽はある。でも争いのさなかにもということはない。この争いのさなかにもというのは戦争のさなかにもということも含んでいるのだろうが、人間関係の次元の争いのさな

かにもということもあるのだろう。地獄のさなかで、極楽天国を見れるということは、眞の『音楽は天を発掘する』と『万物照応』であろう。この二つの言葉によつて最後を結ばせて頂きたい。私にとつては目標である。

キヤツシユレスでお得に

松本 実知子

十月、スマホを買い替えた。その際、ポイントを貯めるのに有利なのでクレジット決済に変えた。消費増税に伴う、ポイント還元に絡んでのキヤツシユレス推進に影響されたのだろう。

以来、毎日の食料品や日用雑貨も通信会社で作ったカードで買い物する事が、多くなった。一二月いっぱいはポイントが付くキャンペーンをしているのだ。政府が実施しているポイント還元も利用しよう。お店によつては5%オフになつたこともある。来年六月までの特典を享受するつもりだ。

スーパーで、その日入用なものをカートに乗せ、

レジに向かう。現金払いなら、レジの表示を見ながらお札や硬貨をトレーに置く。しかし、カード払いでは、

「クレジット払いをお願いします」

と告げ、カードを手渡すだけだ。セルフレジではカードを読み取らせればよい。

簡単な反面、カードを読み取らせた瞬間に決済成立となるのには違和感がある。食料品の購入では、暗証番号の入力もサインもいらないところがほとんどである。利便性を考えれば仕方がないのだろうが軽すぎる。

だからと言うべきか、通信会社で作ったカードで買い物をすると、数時間後にどこのスーパーでいくらの買い物をしたとメールが入る。良いシステムであるが、少々わざわざもある。勝手ではあるが。

落ち着きのなさはあるが、新しく作ったカードでキャッシュレスの利点を追求する気になつた。手持ちのカードも使おう。ほとんどポイントカードとして使つてきたが、クレジット払いとポイントを増やそう。そのカードを作つたお店の5%オフの日を知らせる葉書も来ている。夫の元にも来ている。合計

四日5%オフになるのだ。

早速、5%オフを利用してようと出かけた。帰宅して荷物をしまう段になり、とんでもないことに気が付いた。

夫が、

「このあたりで、一番安い」

と、言つているドラッグストアで買ったはずの胃薬が見当たらない。車の中も再点検したが無い。買い物袋やショルダーバッグの中を探しても出てこない。ごく小さな袋だったので、どこかへ落としてきたのだろうか。儲けたはずの金額位、いやそれ以上が消えてしまつた。カード払いや5%オフに気を取られて、とんだ失敗をしてしまつた。

翌朝、ゴミ出しをしようとあちこちの肩籠をのぞいた。

あれ、大きなポリ袋に茶色のポリ袋が入つている。紛失したはずのドラッグストアの袋だ。ここに捨てたのは誰、夫、私?まあ良いか。見つかったのだから儲けは出た。

みちくさ

儘 田 加寿子

戦争が終わって、世の中が落着いてきた頃、男の子一人、女の子三人の仲良し四人組は四月から小学校一年生になりました。

学校は遠く朝は上級生の人達と一緒に登校し、下校時は朝礼台の下に集つて、四人仲良く帰りました。家までの長い道のりは自分達の住んでいる地域と違つて、車も通らず、小川が流れていました。小川には、めだかや、しじみがいて、あぜ道には、あざみの花が咲いていました。子供達にとつては麦笛、草笛を作つたり楽しい遊び場です。

学校帰りの暑い日、のどがかわいたね、お水が飲みたいと近くの庭にいた女の人に「おばさん、お水をください。」と声をかけ汗びつしよりの四人の子供たちに「井戸水なので冷たいよ」といいながら、家から冷たい水を持ってきて飲ませてくれました。おばさんは庭に咲いていた「かきつばたの花」を一

本ずつ切つて子供達にくれました。その後、学校から帰る道で、のどがかわいたら、おばさんの家によつて、水を飲ませてもらい家のに帰りました。

坂道でリヤカーにたくさんの野菜を積んで売り歩く八百屋のおじさんに会い、「おじさん、押してあげるね」と四人でヨイショ、ヨイショといいながら坂道を登りました。おじさんが、お礼にあんぱんをくれて、空腹なので歩きながら食べました。

夏休みが近づいた頃、道ばたにかわいいピンクの小さな花が咲き、くきが十五センチほどで、子供達はその花を「スッパ」とよんでいました。スッパはくきをとつて口に入れると、すっぱさが口に広がります。

そこへ近所のおばさんが通り、「何しているの」とおばさんが声をかけてきました。

「スッパ」を取つてゐるの。おばさんは「みちくさをしないで、早く家へ帰りなさい。お家の人が待つてゐるよ」といいました。四人はおばさんに「みちくさつてなあに」と問い合わせ、おばさんは子供達にこうして遊びながら、お家へ帰ることよと言いました。

夏休みも終わり二学期からは家の近くに、新しい

小学校が完成し、給食もあつて、子供達は長い道のりを学校へ通うことも、なくなりました。そしてみちくさも終わりました。

あれから長い時が流れ、思いだそうとしても霧がかかつて、見えません。しかし、この四人で学校からの帰り道は私の眼に残っています。

せいちゃん、さつちゃん、みえこちゃん、もう一度、四人でみちくさをしましようよ。

ノムさんの野球と人生

森 真彦

ノムさんは昭和から平成の時代にプロ野球界で大活躍された野村克也さんのことである。選手及び監督として数々の実績を残し、また解説者として独特のキャラクターでファンに愛されてきたが、令和二年二月十一日に心不全のため急逝された。八四歳だった。

ノムさんは昭和十年六月に京都の片田舎、網野町（現在の京丹後市）に生まれた。父を三歳のときに亡くして、母と兄一人の家庭に育ち、小学三年から新聞配達やアイスキャンディー売りをして家計を助けた。兄は秀才だったが、弟を高校に行かせるために大学には行かず就職した。ノムさんは甲子園とは無縁の府立峰山高校から昭和二九年に南海ホークス（現在のソフトバンク）に捕手としてかろうじてテスト入団できた。

プロ野球の世界で生き残っていくには人の何倍も努力する以外はない。練習が終わってみんなが休んでいるときも黙々とバットを振り続けた。不器用な者は練習は当然のこととして、それ以外の方法を考えなければならない。具体的にはカーブを打つ練習や相手投手の癖とバッテリーの狙いを読むことに没頭した。向上心と鋭い観察力、分析力を持ち続けた結果、打者として数々のタイトルを手にした。中でも特筆すべきは三冠王といわれる、本塁打王、打点王そして首位打者を戦後初めて昭和四〇年に獲得したことであろう。

監督としては南海ホークスからヤクルト、阪神、楽天を率い、二四シーズンのうちで、リーグ優勝五回、そのうち三度は日本一になった。この間に各種

のデータを重視する、いわゆる「I.D野球」を開拓する一方、トレードや他球団で戦力外となつて入団した選手に声をかけて励まし、次々と蘇らせた。これは後に「野村再生工場」といわれた。

ユニホームを脱いだ後も解説者として、「ぼやき」

と呼ばれた独特的の口調と率直かつ的確な指摘が好評を博した。一球ごとの投球の狙いを聞いて、野球の奥深さに触れたファンも多かつたに違いない。多くの企業経営者にも人材活用術など役に立つたことと思われる。

ノムさんは野球の指導者として、味わい深い言葉を数多く残している。「チャレンジ精神がなくなれば人生は終わり」「野球は頭を使うスポーツであり、固定観念は悪、先入観は罪」「組織はリーダーの力量以上には育たない」などなど。「指示するのは一つでいい。二つだと迷う。三つだと一つ忘れる」。これなどは実践の中から気づいた知恵であろう。

ノムさんはグラウンドの中に留まらず、数々の著作を残して野球の楽しみ方を説いた。「野球というものは奥が深い。頭の使い方、努力の仕方次第では、弱者が強者に勝つことができるスポーツである。正

しい努力は決して裏切らないのは野球も人生も同じ」と語っている。ノムさんは多くの人材を残した功績も大きく、日本野球界の大功労者なのである。

大庭城址に思いを馳せて

山 下 一 馬

九月に歴史を廻る会に参加した。老若男女20名が大船駅に集合、清泉女子学院の許可を得て、学区内の玉縄城跡を散策、茂みに覆われた裏山に、本丸跡、周囲に諏訪壇、七曲殿、太鼓櫓跡が見られ、城の防御、攻める側の苦戦に思いを巡らせ険しい藪の中を歩き回る。玉縄城の東に向かい、北条氏と戦った長尾城跡を散策、辻堂に移動し大庭城址公園に向かう。小高い山の中に整備された公園があり、草木で覆われた外側には深さ2メートル以上の横堀、最大で4メートルもある土塁が残つており、城主の館、本丸が急勾配防御施設で守られている。山の周辺は引地川と小糸川に挟まれ、川沿いの遊水地が沼地で開まれ難攻不落の名城であつたと伺える。大庭の歴史を

紐解くと、引地川は、自然湧水の沢で古来縄文時代から人が住み、平安末期に大庭の地は、大庭御厨（みくりや）と呼ばれ、鎌倉権五郎景政により開拓された莊園は伊勢神宮に寄贈された。その子孫は大庭と改姓、大庭景親はここに大庭の館を築城し、源頼朝と合戦した。大庭氏滅亡後、扇谷上杉の家臣、太田道灌が大庭城を築城したと言われている。その後、北条早雲が相模に侵攻し、この城を攻撃した際、城の前面と左右に広がる田畠は、一面沼地であった。城攻めに困窮した武将に、城の対岸、稻荷の老婆が「堤を切れば水は干上がりります。」と、堰（せき）の場所まで教えてくれた。武将は大事が漏れるのを恐れ、老婆を斬り殺した。北条勢の正面総攻撃により大庭城は落城した。哀れな老婆の死を悼んだ地元の人々が地蔵様を祀つたのが舟地蔵と言われている。北条氏は、小田原城を拠点に玉繩城を構築し、長尾城と向き合う。大庭城はその中間地点に位置し、戦略的役割を終える。やがて北条氏は、秀吉の軍勢に囲まれ、家康と和議を結び開城、大庭城も廃城となる。一九九二年に大庭地区に湘南ライフタウンが開発され、大庭城北側の一部が区画整理で削平され、南側は大庭城址公園として残される。私

の住んでいる台谷（だいやと）は、ライフタウンの南側にあり、ゴルフ場の北側に面し、台と谷の地形にある。第二は臺谷（だいやと）稲荷があり、大庭神社の旧跡は、この付近で有った説もある。台谷町内は台組、谷（やと）組、築山組があり、築山は北条勢が大庭城攻めの際に築かれた山と言われている。又、舟地蔵は舟地蔵公園のそばに祀られているが、老婆が乗つている石船（老婆が三途の川を渡るため）は、台組の地に有るものが原型とも町内では伝えられている。大庭は、城址公園、東側の道路を隔て引地川が流れ、周辺は遊水地、親水公園、その南には田畠が広がり、自然豊かな緑に恵まれ、四季折々に草木の色が変わり、野鳥が多く観察される。私は、数々の歴史の経緯を経たこの地で早朝散歩を楽しみ、公園の小高い丘から富士山を望む。大庭の歴史に思いを馳せて、桜の季節には、大庭城址公園で美味しい酒と肴を戴きたいものだ。

國破山河在、城春草木深

原爆記念日に

山田節子

ちの悲惨な暮らしを垣間見ることはあったが、今夏五年目の原爆の日特集として放映された真実は、想像を絶するものだった。何故大人たちが、戦争中を話題にしなかつたか、その理由を少し理解できたような気もしてきた。

二〇二〇年八月六日は、世界で初めて原子爆弾が広島に投下されて七五年目を迎えた日だった。アメリカ軍が撮影したもののはじめ、未公開の投下直後の映像や生き証人の声を、積極的に聴いてすごした。

私は一九四三年東京牛込で誕生したが、二歳の時、広島市郊外比治山の麓の防空壕内に母に抱かれた状態でいたおかげで、直接の被爆から逃れることができていた。父は私の誕生一ヶ月後に軍医として出征。中国大陸から生還してほどなくして広島の爆心地近くの建物の中で被爆、直後から被災者の救護にあたり、一週間後ようやく帰宅するという有様だったと聞いている。もし母が当日の勤労奉仕の当番にあつていたら：父がもし閃光の直撃を受けていたら：私はどんな人生を歩んでいただろうか。両親から戦争の話はほとんど聞いたことはなかった。

当時を舞台にした番組や映画から、当時の子供た

人たちの検疫業務そして復興は健康な社会づくりの基礎をと奔走する父達の姿から、子供心にも、国難事に、いろいろな分野の人たちが我を忘れて、献身的な行動をするのだと考えていたようだ。

成長期は、まさに国中が、復興、開発、進歩を目指した活気そのものの中についた。どんどん便利に、快適に、豊かな暮らし方は身近なものとなつていった。でもそれらが、ふつうのことになつた日常は弊害を見せはじめているのではないかだろうか。

今の暮らし方に納得して生きる世代に、あえて伝える機会はないだろうが、私は時折、自分の成長期に学んだ知恵を思い出して、心だけはその頃の夢にむかつた日常にしていきたいという思いを深めている。コロナ禍一色の自粛生活に慣れている自分に、もしや老化のせいいかしらと思うこともあるが、大昔か

ら数多のウイルスと戦いながら逞しい人類として進化してきたといわれると、基本的な自肅生活のやくそく事の継続が勝利にむかう力になると確信したいものである。

郷土の料理「瓦そば」

山成健治

(文芸光風)

ある日、新聞を読んでいたら、私が小学校四年の途中まで居た山口県の川棚（現在は下関市に編入）を中心に、「瓦そば」という料理が、今や大変な人気であるという。しかも「瓦そば」の生みの親は、私の父と同期であつた故高瀬慎一さんであると書かれてあつたので、「瓦そば」なるものが大変身近なものに思えてきた。

先ず「瓦そば」という命名の由来であるが実にシンプルで、出来上がつた料理を皿ではなく、瓦に盛り付けるからだという。高瀬さんは以前から「川棚には立派な瓦が沢山残つてゐるので、瓦に料理を盛り付

けたら面白いかも知れない…」との思いが、頭のどこかに残つていたそうだ。（ご親族の話）

しつかりした瓦が川棚に沢山残つていたのは、川棚には「湯町」という地区を中心に、昔から立派な温泉

が湧き出でていて、江戸時代から湯治場として栄えていた事によるものらしい。即ち、この時代は確かに贅沢

は禁じられていたが、「湯町」には長州藩の役人たちも湯治に訪れていたので、防火性に優れ、見栄えの良い瓦葺きを用いることが許されていたのだという。このため、ふきかえて不要になつた瓦が湯町のあちこちに残されており、高瀬さんはそれを見て料理に使おうと思ったのではないだろうか？というのである。確かに私も川棚に居た頃、縁側の下に、真っ黒な瓦が沢山積まれていたことを覚えている。

さて、料理の方であるが、この瓦を予めよく熱し、焼けた瓦の上で茶そばを合体させるところから、「瓦そば」料理はスタートするという。茶そばの上に、塩で味付けした牛肉、錦糸卵、青不ギ、海苔をトッピングし、レモンの輪切りと、もみじおろしをのせて完成だという。これを、カツオと昆布で出しを取つたつゆにつけて、いただくのだそうだ。

「瓦そば」の人気の理由の一つは、華やかな色の組み合わせにあるのだという。確かに、茶そばの緑色、錦糸卵の黄色、レモンスライスに乗ったもみじおろしのオレンジ色などが、器である真っ黒な瓦の上に盛られているのだから、見た目にも鮮やかで、大いに食欲がそそられることだろう。

「元祖瓦そばたかせ」の店は、山口県内外に五店舗有り、年間約四〇万人の入店客が有るそうだが、八割近い人たちが「瓦そば」を注文するという。今では下関を始め、山口県内の多くの飲食店・旅館が、「瓦そば」をメニューに取り入れているそうだ。

来年には、川棚小学校・中学校で学んだ者が「喜寿の集い」を開く話も出でていて、その折には、私も「瓦そば」なるものを、ぜひ賞味したい、今から楽しみにしている。

講演をして頂いた。テーマは「カンボジアに桜中学校をつくりたい」。

小山内美江子先生は「三年B組金八先生」NHK連続テレビ小説「マーサちゃん」NHK大河ドラマ「徳川家康」「翔ぶが如く」など、次々とヒット作を生み出す。

「人生は還暦から」と、一九九〇年、湾岸戦争勃発により六〇歳で、海外ボランティアに目覚め、一九九一年暮れ、二谷英明さんとタイ国境の難民キャンプへ。一九九三年大学生ボランティア中心の組織「JHP・学校をつくる会」を設立。それから約二五年の間に、カンボジア、ネパールに、先生は大学生を連れて訪れ、三五〇棟を超える学校を建てた。

一九九三年に私たちも、ヒマラヤ・ラダックに識字教育のセンターを創る活動を始めた。いつも小山内先生に心の大きな支えになつて頂いた。ヨルダンでの平和の国際会議に出席する時も、小山内先生から親切なお手紙を頂いた。「トルコからの知らせによりますと中東一体は早くも寒さに厳しいとか。けれど日中の気温高いはずですので、重ね着の衣装計画をおすすめいたします」

小山内美江子先生

横田佳代子

一九九六年、小山内美江子先生に高校の同窓会で、

カンボジア大使館のお正月に招かれた事があつた。カンボジア大使ご夫妻が小山内先生を心からもてなし、感謝しておられた。

二〇一三年「我が人生、筋書き無し」の出版と八三歳のお誕生日を祝う会が開かれた。小山内先生を囲んで3年B組金八先生の出演者、高田敏江さん、杉田かほるさん、吉行和子さん、鶴見辰吾さん達がカメラに収まつた。今川幸雄初代カンボジア駐日大使ご夫妻、秋山ちえ子さん等、先生を支援している多くの人々の笑顔があつた。

「先生のことを藤沢文芸に書かせて頂いてよろしいでしょうか」とお聞きすると「いいわよ」とにつっこり笑つて、すぐ母校の校長先生を紹介して下さった。校長先生は「鶴見高女は文化祭で、毎年、一教室を小山内先生の「JHP」の展示室にしてます」と言われた。女学校の一年の時、「旅立つ時はどんな宝物も名譽も家族も使用人も連れては行けない。一緒に行くものは、この世で行つた良いこと悪いことだけである」という曹洞宗の開祖道元の教えに触れ、感銘を受けた。

た横穴式の防空壕にB29が墜落し、避難していた人は全員が亡くなつた。「地球上の若者たちに戦火で殺し合いでさせてはいけない」と、先生は願つてゐる。

父親は、ダンディで、事業家で、経営能力に優れ、誰からも好かれた。母親は、料理が上手。人の心を読み取り、皆を幸せにした。両親の生きざまから多くを学び、先生も本質を見抜く力があり、長年、平和活動を実践された。先生は自分の時間と、財力も、人の為に使い、ろうそくのように、自分の体を燃やし、周囲を照らし続ける人生を送らでいる。

新しい生活様式

吉田秀子

今まで長い間、常識とか当たり前とか思つてきた物ごとや考え方、そして日常の生活が二〇二〇年で歴史的に変わりました。

新型コロナウイルスの感染が猛威を振るいだした令和二年三月以来、行動の自粛が続き、人と人との関わりが少なくなりました。また、経済活動の自粛による

生産活動も低迷し、仕事も毎日通勤して行っていたものが在宅勤務に切り替えられるなど、今までには考えられないことが起きています。

ひよつとしたら、神が新型コロナウイルスを通して、私たちに考える時と機会を与えたのではないでしようか。

戦後七五年、私たちは右肩上がりの、いわば「動」の生活をして来ました。それが今、いろいろな面で自肅を強いられています。その意味とは何なのでしょうか。今までの「動」ではなく「静」を天から与えられているのではないでしょうか。

そこから何を得るのか、何を生み出すのかという啓示ではないかと思います。時間にゆとりが出来たのですから、今まで出来なかつた問題の発見と反省に冷静に取り組み、その解決をすることができるようになつたのです。

教養とは、物事に対して広い心で見（観）、深く判断する力を養うための道具です。教養を蓄えると、人生結構楽しめますよ。何かを「知りたい」という思いは、人によつて異なります。「深く知りたい」という気持ちは、たくさんの人と会い、絶えず問題意

識を持ち、たくさんの本を読み、そして毎日の新聞を読むことによって満たされます。また、いろいろな所に出かけて刺激を受け、自然から学び、そこから得た知識を教養として、自らの引出しに蓄え、日々の生活にいかせたら最高だと考えます。

「救済の日は今であり、現在を今日を、誠実に真剣に先を考えずに生きることが、未来への唯一の保障となる」とウイリアム・オスラー（一八四九～一九一九）は述べています。カナダの小さな村で生まれたオスラーは、医師の教育に熱心に取り組んだ人でした。

医師である日野原先生は、「医者は、どんな時も動じない平常心を保つ事が大切である」というオスラーの「平静の心」という言葉に感動したと述べられています。一九七〇年三月、九州の学会にいくため乗つた飛行機が日本赤軍にハイジャックされたあの「よど号」事件に巻き込まれたとき、オスラー博士の言葉が胸をよぎつたそうです。

『平静の心』、平常心であらねばならない。少し興奮している時にあの言葉を思い出しました』と経験を語られました。長い人生の中でいろいろなことが起きます。今は、「コロナを通して時代の変わり目だ」と感じて

います。

今日精一杯生きる事が、明日への夢と希望に繋がり、
その実現に至る道だと考えます。

一字の違いで

吉田弘美
(てつせん)

「外科の新人男子、細身でハンサムね」
「あなたの好みよね」
「フフッ」。

お二人共通の話らしい。

駅南口で、鳩の形をした焼菓子を買った。その帰り
に藤沢駅から茅ヶ崎駅行のバスに乗る。辻堂駅までは、
東海道線沿いを走る。

発車直前、すぐ前の席に高齢女子お二人が着席した。
同じデパートの紙袋をお持ちだ。

「お向いのお孫さん、来年高校受験だつて彼女言つ
てたよ」

「あー、あの男の子ね、彼女が母がわりだから大変ね」。

どうもこの近所の話らしい。俯いてヒソヒソとした話
も、全部聞こえてしまう。

「小学生の時は、おばあちゃんつて言つてたのに、
先週の夜『うるせいなばばあ、黙つてろ』だつて」

「そう、ひどい言い方ねえ」。

少し間があった時、バスは引地川を渡つた。

「そうそう、この間主人がね『じいじ』と『じじい』
の話ししてたよ。たつた一字違ひだけど、じじいはや
だね、だつて」

「わかる、ばあばとばばあもね」

「ばばあは、やねえ」

「子育てのころ、息子や娘に言われた」

「そ、そ」

「あの子たちの青春だつたかも」

「でもさ、私たちの娘時代、親に言つた?」

「さあ、忘れちゃつたよ」

「加齢現象です。加齢つて、あのドクターに言われ
るよ、きっと」

「それ、正解」。

お二人は、クスクス笑いをしている。

辻堂駅に近いころ、車内案内テープが停留所名を告

げた。続けて介護施設の訪問介護を案内した。当然だが、「ホウ・モン」とアナウンスしている。

「今、あなた、何て聞こえた?」

「あなたと同じよ」

「ホウ・モンとは聞こえなかつた」

「車内のノイズを拾つているのかなあ、ホウ・モンとは聞きにくい」

「なるべくお世話にならないように」

「ま、優等生!」

辻堂駅近くのバス停で下車したが、お二人はそのまま茅ヶ崎方面に向つた。どこで下車するのだろうか。おそらくあの話が続いていくように思えた。

夕方、隣の新築に入居した若いご夫婦に久しぶりにお会いした。

三歳と一歳のお子も居た。ともに男児で、保育園に行つている。

フェンス越しにお兄ちゃんを呼び、焼菓子を少しあげた。ニコニコしながらペコリと頭をさげ、丁寧なお礼があった。

「ありがとうございます。おじいちゃん」。

「そのとおりなんですけどね……」。

春宵一刻値千金

渡辺じゅん

(文芸光風)

どこからか、沈丁花の香りがほのかに漂つて来る春の夜だった。お風呂で髭を剃つていると黒子やイボが邪魔をして剃りにくい。七十年も生きてきた証だらうから、それは仕方のないことだが、畑に出て太陽に晒された私の顔は、シミも黒子も賑やかで、まるで星座盤のようだ。それにひきかえ、湯船に横たわり湯から突き出た足を見ると、甲や爪先は顔に比べてかなりきれいで見える。靴や靴下に守られているから、まるで若者のように美しい。よく見ると太腿とか尻とか、常に幾重にも覆われている部分は男の私でも白くしっとりとしている。池に映つた自分の姿に恋をして、ついには水仙になつてしまつたナルキッソスのように、自分の裸体に見とれてしまった。

『まるでダビデ像のよう……いけない!このままだと白い百合の花になつてしまふ』そんな訳はない、結

構毛は生えているし、古希の爺さんの裸が美しい訳がない。冗談ともかく、美しいというほどではないにしても、きちんととした食事を摂っている元気な日本の中高年は、男女を問わず、隠れた部分の肌は若々しい筈だ。ものは試しと湯を手で掬つて二の腕にかけてみると、何と私の肌はまだ湯を弾くではないか。私の肌はまだまだ若い。

『凝脂^{きのうじ}を洗う』というやつだな、これは

私は長恨歌の一節を思い出した。

春寒賜浴華清池 温泉水滑洗凝脂
（春寒くして浴を賜う華清の池 温泉、水滑らかにして凝脂を洗う）

今、将に玄宗皇帝の寵愛を受けるべく、華清宮の温泉で侍女達に助けられながら、楊貴妃が湯浴みをしているところであります。

「いやあ、流石に国を傾けたほどの絶世の美女、入浴している楊貴妃は、なよなよとして実に色っぽい、官能的やねえ。ホント、春宵一刻値千金だよねえ」少しのぼせて風呂を出て、テレビドラマを見ている細君に

「おい、俺の肌はまだお湯を弾くぞ」

と得意げに言うと、振り向きもせずに「ちゃんと洗ったの。汚れているんぢやないの。長湯して、遊んでばかりいちやダメよ。加齢臭は嫌われるわよ」

「……」

二の句が継げない。値千金の上機嫌は一遍に吹き飛んでしまった。

『クツソー、このクサンティツペめ！』

注

*ナルキツソス ギリシャ神話に出てくる美青年、ナルシスとも言う。ナルシズム、ナルシス

トはここから派生した。

*クサンティツペ 哲学者ソクラテスの妻 がみがみ女で稀代の悪妻と言われる。定説とは異なる見方もある。